

主日礼拝

2023年1月8日（日）

題 「晩年の恵みの出会い」

テキスト：ルカによる福音書2章22～38節

皆さん、おはようございます。

お正月をどのように過ごされたでしょうか。2023年の皆さまと洲本教会の歩みの上に主の祝福をお祈りいたします。地上に平和が実現しますように。

さて、今年は礼拝では基本的にルカによる福音書を少しづつ学びたいと願っています。今日の聖書の個所には、生まれたてのイエスが神殿で神に捧げられた場面が記されています。

この場面には、年老いた二人の男女の人が登場しています。シメオンという人と、アンナという人です。

二人とも年老いて救い主イエスに出会った人です。それは文字通り恵みの出会いでした。最初はシメオンそしてアンナが登場しています。

◆神殿で献げられる

22:さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。

23:それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。

ルカによる福音書によれば、イエスはユダヤのベツレヘムで誕生しました。

そして父ヨセフ、母マリアの故郷のガリラヤのナザレで育ちました。

当時のユダヤ教の規則、律法の教えでは、最初に生まれた男児は神に捧げるといふ考えが支配的でした。生まれて8日目に名前をつけ、母親の清めの期間が過ぎて

40日たってから神殿に出かけます。そのことは旧約聖書にも記されています。この決まりに従って、イエスの父ヨセフとマリアは、イエスを抱いて神殿に向いたのです。

裕福な人は羊を捧げたようですが、貧しい人は、24節にあるように、

24:また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがい、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであったのです。宗教的配慮を言えるのかもしれませんが。

この時、老人シメオンと幼子イエスとの出会いが起こったのです。この出会いは、感動的に描かれています。

25:そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。

シメオンは、昔からイスラエルに伝わる、救い主、メシア・キリストの誕生を待ち望んでいたのです。シメオンという名には、「聞く、耳を傾ける」という意味があるようです。古代ユダヤに由来する名前です、この名がギリシア語化された名がシモンとなります。シメオンは、人間として正しい人で、神を信じ、当時は大帝国のローマ帝国がユダヤ・イスラエルを支配する中で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいたのです。そして、大切なことは、彼には聖霊がとどまっていた。」ということです。聖霊とは、今も働く生ける神の力であり、信仰と希望と愛の源と言えるでしょう。ともかくシメオンは老いてなお神に与えられた信仰と希望、そして愛に生きた人だったのです。そして、彼は救い主に会うまでは死ぬことはない、示され確信を持っていたようです。

26:そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。

この後、決定的な感動的な場面が伝えられます。

27:シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。

シメオンと神殿に来たヨセフとマリア、そして布に包まれたイエスとの出会いがあったのです。

「28:シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。」

幼子イエスを腕に抱くシメオンはどんな気持ちだったかと思います。長く待ち望んだ末の喜びに心震え、心の底まで慰めに満たされたのではないかと思うのです。

「28:シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。」シメオンは神をたたえます。まさに、ハレルヤ！だったと想像します。

シメオンは、まっすぐに神に感謝しています。29節～32節。

29:「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。

30:わたしはこの目であなたの救いを見たからです。

特に最初のことば「主よ、今こそ」という言葉はラテン語で「ヌンク・ディミテイス」で、「シメオンの賛歌」と呼ばれて今日まで伝えられています。

とりわけ、わたしの心に残ることばは、「30:わたしはこの目であなたの救いを見たからです。」というシメオンのものは何が起こってもぐらつくことのない確信です。この嬰兒（みどりご）イエスは、神が万民のために整えてくださった救いと呼ばれています。善人の上にも悪人の上にも日は昇るように、貧富の違いや性差・人種などを超えて、すべての人に救いをもたらす方なのです。

一方、「33:父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。」そばにいたヨセフとマリアは、このシメオンの言葉に戸惑い、驚きます。シメオンはヨセフとマリア、特にイエスの母マリアに語りかけています。この場面と言葉も忘れることはできません。「34:シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。」

35:—あなた自身も剣で心を刺し貫かれます—多くの人の心にある
思いがあらわにされるためです。」

ここには、成人して後のイエスの十字架に至る試練と苦難の道が暗示されているようです。つまり、イエスは、「反対を受けるしるしとして定められているということ。」です。

必ずイエスに味方する人と、反対する人、受け入れる人と拒む人が出てくるということです。

わたしたち人間の罪、自己中心主義・エゴイズムは根深く、国家のエゴイズムも根深いものがあります。

主イエスは、天と地を愛をもって創造された神の独り子であり、人間を罪から、死と罪から救い出すことのできるただ一人の方、救い主です。わたしは、マリアに対する 35 節の「あなた自身も剣で指し貫かれます。」というシメオンの一言に胸が痛くなりました。

皆さんはどうでしょうか？

私たちが時に人から向けられたひと言で心が貫かれるような経験をすることがあります。「マリア自身も神の子イエスの言葉で心痛めたこともあるでしょうし、何より愛する我が子イエスを十字架で失ったのです。「多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」イエスの十字架の前では、わたしたちすべての人間の心にある思いがあらわになり、暴かれるのです。

そして、イエスの十字架の死によって、すべての人は救われたのです。これか

らも救われ、心を解放してくださる清き愛なる聖霊の働きは間違いなく続いていくのです。

そして、もう一人の女性アンナです。

36:また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとって、若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、

37:夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、

38:そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。

アンナという名前は古代にはよくある名前です、その意味は「恵み」です。アンナについてはシメオンほどは、多くの事は記されてはいませんが、

「若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、37:夫に死に別れ、84歳になっていた。」苦勞の人生を歩んで来た女性。平均寿命が今より、ずっと短かった古代のこと、84歳という長き人生をコツコツと生きてきた女性アンナのように思えます。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていました。これは、アンナは神に祈ることと賛美することから離れることはなかったということだと理解するのです。

38:そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。」と。短い記事ですが、アンナという隠れた信仰者の姿に、大切なことを教えられます。

わたしたちは、幼子イエスに出会った二人の人の姿を通して、長寿社会の現代、老いてこそ、ますます神さまが備えてくださった恵みの出会いがあることを思わされ、神の恵みを感じて生きて行きたいと願います。

皆様の上に、主の平安を祈ります。共に黙想しましょう。